



三上 樹菜
Mikami Nana

「ドクターヘリでの活動は、普段とは異なる環境で、物品や人員も限られる中、患者さんにとって何が最善かをチームで考えながら対応しなければなりません。看護技術自体は院内で行うものと大きく変わりませんが、いざというときに自信を持って実践できるよう、シミュレーションを重ね、それらの経験をチームで共有することも大切にしています」と、フライトナース歴5年目の三上さん。

フライトナースになるために
～三上さんが歩んだ道～

- 川崎医療短期大学 看護科入学*
- 卒業後、看護師として川崎医科大学附属病院 高度救命救急センターに勤務
- 看護師として6年の実務経験を経て、フライトナースになるために必要な研修の受講を修了
- 2022年5月より、フライトナースとして活躍中

※川崎医療短期大学 看護科は、2022年4月より看護学科に学科名称変更。



ドクターヘリに関わるフライトドクターとフライトナースたち。運航時間終了後には必ず5職種のスタッフが集まり、それぞれの立場で意見を交わすことで、互いの理解と信頼関係を深めている。



森末 可奈子 副主任
Morisue Kanako

2020年からフライトナースとしてドクターヘリに搭乗している森末さん。現在は、搭乗訓練におけるOJT指導者として、フライトナースを目指す後進の育成にも取り組んでいる。

フライトナースとは？

ドクターヘリに医師とともに搭乗して現場に向かい、医師による救命処置の補助や患者の看護、その家族の心のケアも担う。搭乗日以外は、救急科の外来や集中治療室、病棟での業務に携わっている。

医療最前線

>>>vol.106

川崎医科大学附属病院

看護部 フライトナース
三上 樹菜
Mikami Nana

看護部 フライトナース
森末 可奈子 副主任
Morisue Kanako

Report!

「救命のための医療と看護」を胸に 救急現場へと飛ぶフライトナース。

命と心を救うため、
医師を支え、患者に寄り添う。

初期治療に必要な医療機器や医薬品を搭載し、救急医療を専門とするスタッフをいち早く救急現場に送り届けるドクターヘリ。川崎医科大学附属病院では、1999年10月から2001年3月にかけて厚生省（現厚生労働省）のモデル事業として試験導入し、同年4月より本格運航を開始した。

そんなドクターヘリに搭乗するフライトナースのひとり、森末可奈子さんは北海道出身。フライトナースを目指し、遠く離れた同院を志望した。「フライトナースの役割のひとつは、医師が治療に集中し、迅速に処置できるよう環境を整えること。そのため看護師として5年以上、そのうち救急看護師として3年以上の経験が必要で、自己研鑽力やコミュニケーション力など総合的な人間力も求められます」。そう話す森末さんは、スピードが求められる現場において、もちろん救命第一ではあるが、細かな気配りや、患者や家族への配慮まで含めて、フライトナースが行く意味を実感しているという。一方、川崎医療短期大学を卒業し、川崎医科大学附属病院に就職した三上樹菜さんは高度救命救急センターで勤務する中、フライトナースを目指して挑戦する先輩の姿に憧れ、「かっこいい」と感じたこととなった。現在、フライトナースとして現場で活動する中で、自分が関わった患者が回復し、元気に退院していく姿を見られることに、大きなやりがいを感じているという。フライトナースとして大切にしているのは、患者やその家族が口にする「よろしくお願ひします」に込められた、それぞれへの思い。「患者さんに一番近い存在である看護師としてしっかりとみ取れるよう意識し、それを自分の行動に移すだけでなく、医師に伝えて治療に反映してもらうことも役割のひとつだと思っています」と、真摯な表情を浮かべる。

10人のフライトナースが交代で搭乗する同院ドクターヘリの出勤は、今年7月に無事故で1万回を数えた。これまで多くの命を救ってこられた背景には、消防や警察、行政、地域の医療機関にいたるまで、多方面との連携や救助先を含めた地域の人たちの理解と協力、何より医師、看護師、パイロット、整備士、通信の専門家であるCSという5職種のチームワークがあったからこそ。先輩フライトナースから受け継いだ「救命のための医療に看護をプラスして、命だけでなく心も救う」という思いを後進に伝えるべく、育成にもより力を注ぎ、今後ともより安全・安心な医療と看護を心がけていく。

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎0864662111
<https://h.kawasaki-m.ac.jp>

※写真は取材用に撮影したものです

■2026年10月25日号掲載 本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。